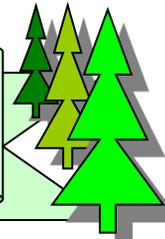




街路樹



「教師力upの素」



「不登校」

「授業スタンダードをみても、授業でどう働きかけていいのか、具体的なイメージがわかりません。」「子どもたちは調べたことを発表したのですが、そこからつなげていくことがうまくいかず、考えが深まりませんでした。」

こんな先生方の悩みや課題の解決の一助になるように、「教師力upの素」が作成されています。

総合教育センターの「調査研究委員会」は、平成20年に、児童生徒に対する教育の推進を図るための研究を目的に設置され、国語・社会・算数数学・理科・英語の教科部会、生徒指導部会、特別支援部会の7部会でそれぞれ研究を進めてきました。(本年度からは道徳部会も設置しています)

2年間にわたっての調査研究を市内の先生方に活用していただくために、今まで冊子での各校配布、DVDの貸出、DVDでの各校配布と様々な方法で先生方へ届けてきました。今回「ホームページへのアップであれば、先生方のニーズに応じた活用ができるのではないかと、本センターHP上での活用といたしました。(今までの調査研究もHPへアップしていますので、ご自分の研究教科等、検索してみてもいいかもしれません)」

「授業スタンダード」では授業実践のカギを開けると授業における「教師の働きかけ」「主体的・対話的で深い学びの実現に向けて」「子どもの姿」「指導技術」が授業の流れに沿ってまとめられています。演習シート「研修用教師力upの素」をプリントアウトし、動画を見ながら教師の働きかけや指導技術、子どもの姿について気づいたことを書き込んでみましょう。その後、「解説用教師力upの素」と比較し、さらに考えを深めていきましょう。

「解説用シート」は、調査研究委員会からの一つの提言です。授業を見ていくとともに、様々な教師の働きかけが見えてくるかもしれません。その「見方」は先生方の糧となるはずです。

文部科学省の調べによると、福島県の不登校児童・生徒数は、平成22年度1575人、平成26年度1785人と13.3%増加しています。震災後という視点でみると、福島県は全国トップの不登校児童・生徒の増加率です。平成28年度の調べでは1868人とさらに増加が続いています。

いわきチャレンジホーム(適応指導教室)では例年、入級者が、4月に比べて3月末には約3倍にも増加します。

様々な経緯や要因から不登校に至った子ども達ではありますが、入級時の教育相談で共通していることは、「教室が怖い、みんなの目が怖い」という言葉です。ある生徒が、チャレンジホームの調理実習中に「人生をやり直したい」と話してくれました。皆、「明日こそは、学校へ行かなければ」と学校へ行けないことに罪悪感をもち、悩み苦しんでいます。不登校児童・生徒は、精神的なエネルギーが低下していたり、強い対人恐怖を抱くようになっていたりします。

チャレンジホームでは、学校や家庭と連携をとりながら、児童・生徒に無理のないようエネルギーを回復させ、恐怖や不安を軽減し、自信をもたせられるよう支援を行っていきます。同時に、その子がどうして不登校になったのか、学校現場の先生方とその背景を一緒に考えていきます。



「福島の子どものメンタルヘルスガイドブック」より
国立大学法人 福島大学
子どものメンタルヘルス支援事業推進室



「学級づくり①」

小学校学習指導要領では第1章総則及び第6章特別活動において学級経営の充実が示されています。そして今回の改訂では、中学校(第1章、第5章)でも学級経営の充実について新設されました。児童生徒と担任の生活の基盤となる学級が、一人一人の存在感を実感できる場となるようにしていきましょう。

1 「ほめる」・・・自己肯定感を高めます。

○ 教室に入ってきた先生が一言「よい姿勢の子がいるね」さらに「よい姿勢の人が増えたね」

2 「認める」・・・自己肯定感の土台となる自尊感情を育みます。(「ありがとう」は子どもを認めるための最高の言葉です。)

○ 「手伝ってくれてありがとう」「助けてくれてありがとう」「この教室にいてくれてありがとう」・・・まずは先生から。

3 基準を明確にして「叱る」・・・感情に走ったり、昨日と違う基準で叱っては、納得も信頼もされません。

(1) 命に関わる危ないことをしたとき (2) 人の不幸の上に、自分の幸せを築こうとしたとき

(3) 3回注意されても直そうとしないとき

(南恵介・総合教育技術2017. 7、野口芳宏流「叱る3原則」)

先生にほめてもらえること、認めてもらえること、なぜ叱られたのか理解できることにより、児童・生徒は先生を信頼し、教室が自分の居場所だと感じる事ができるのではないのでしょうか。

